

【図書紹介】

姚毅『近代中国の出産と国家・社会——医師・助産士・接生婆』、  
研文出版、2011、387 頁

王 玥玥

<Book Guide> Yao Yi, Modern Chinese Delivery and State, Society-Doctors,  
Midwives, Traditional Midwives, 2011, 387pages

WANG YUEYUE

## 1 はじめに

本書は、著者の姚毅(ようき)が 2008 年に東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻に提出した博士論文(「産科医・助産士・接生婆——近代中国における出産の近代化と国家化——」)を加筆・修正し、出版したものである。目次構成は以下の通りである。

序章 出産と近代中国

第一章 伝統的産婆の世界と医者

第二章 西洋産科学の伝来と受容

第三章 医の専門職化と医師・助産師・産婆の分業の形成

第四章 国家による介入—助産者に関する制度の変遷

第五章 助産教育のシステムの形成と実態

第六章 出産の現場—各アクター間の権力と交渉

第七章 出産の近代化に対する女性たちの反応

終章 近代中国のジェンダー・国家・文化

資料・文献一覧

あとがき

本書は近代中国において、医師、助産士による産婆の代替プロセスを解明することを目的とすることを通して、その背後にある権力関係を考察しようとするものである。姚毅はまず、伝統的な産婆世界の様相を描き出し、そこから近代における西洋科学・産育知識の導入プロセス、医療世界における職業専門化の形成、母子衛生における政府の動向、助産教育の実態、当時の女性の新式出産に対する反応まで、考察している。そのなかでは特に

北京市都市部に焦点が当てられている。以下に見ていくように、各章からは、近代中国における伝統的出産文化と近代的出産文化とのせめぎ合い、および出産に関わる中国の特徴を、具体的文脈の中で読み取ることができる。

## 2 著者紹介

著者の姚毅は、中国人民大学から卒業し、2008年に、本テーマの論文をもって、東京大学大学院総合文化研究科関連社会科学専攻博士（学術）学位を取得した。同書刊行時点では、日本学術振興会外国人特別研究員であった。

主な著書・論文には、『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』（共著、研文出版）、『ジェンダー史叢書』第八巻『生活と福祉』（共著、明石書店）、「近代中国における助産領域の専門職化とジェンダー」（『中国—社会と文化』第25号、2010年）、「母子衛生システムの連続と転換——建国前後の北京市を中心に」（『近きに在りて』第58号、2010年）などがある。

## 3 本書の概要

著者は「序章 出産と近代中国」で、本書で扱う時代区分、検討する課題、及び用語の定義について述べている。まず、姚が扱う「近代」とは、19世紀末から1949年までの時期である。この時期を「民族形成（nation-building）と近代的国家建設（state-building）が同時に行われ、ジェンダー秩序が再構築される」<sup>1</sup>時期であると認識している。本書の検討課題について著者は、主に、「一、国家医業職能団体、二、専門職化とジェンダー、三、中国近代性と文化システムの転換」の三つを検討するとした。

また本書における用語について姚は、以下の表のように整理している<sup>2</sup>。

西洋医学		伝統医学	
名称	定義	名称	定義
医師	西洋医学や知識をベースとする正式な医学教育を受けた医療従事者	医者	免許制以前の伝統的医療従事者
		医士	免許制以後の伝統的医療従事者（1943年後「医師」）
助産士	西洋医学や知識をベースとする正式な医学教育を受けた助産者（「新産婆」「新式産婆」「助産婦」「助産女士」「現代産婆」とも呼ばれた）	産婆	広く伝統的な助産者（明示しない限り「接生婆」を含む）
		接生婆	南京政府期から短期的教育を受け、免許を持った伝統的助産者（共産党根拠地では「衛生員」とも）

「第一章 伝統的産婆の世界と医者」において著者は、近代以前の伝統的な「産婆の世界」の特徴、医者と産婆の関係、出産観と身体観及び産婆が担うべき仕事とその社会的文化的機能を明らかにした。

まず、中国の「産婆の世界」の特徴としては、(1)助産者の呼称は、地域・時代によって様々である、(2)ほとんどの産婆による助産は共同体のなかでの相互扶助的色彩が濃かった、

(3)産婆に「助産」以外の死産や女性死体の検視などの「公」的役割も期待されていた、(4)産婆と医者が共存していた、という四つの点が挙げられている。

そこで医者は、産婆を取って代わろうとする積極的な行動を取らず、顧問としての役割のみを担っていた。医者は産婆の医療行為自体を批判しながら、優れた産婆についてはその技術と能力を認めた。

近代以前の胎児観・出産観は、「陰陽五行」、「気」、「血」などの包括的な概念の上に立ち、自然主義的要素も内包し、哲学・思想・倫理・道徳と分割できないシステムになっていた。その胎児観・出産観は不変なものではなく、18 世紀に通俗的な産科書の流行に伴い、その重点は哲学的な思考からより実践的なものに変換された。「血」、「気」など形而上学的宇宙論的な議論は減少し、出産行為における産婦の主体性が強調されたとした。それによって、身体に関する知は、医者、産婆、産婦に共有されることになった。

同章の最後に、姚は、産婆が担うべき仕事とその社会的文化的機能について、産婆には助産の技術だけではなく、出産・助産経験、人柄、臨機応変の対応能力と優れた喋り方なども求められた点を明らかにしている。産婆は「助産」をする人だけではなく、社会秩序・宗教秩序の協調、新生児の祝福という社会的文化的役割も担っていたとされる。

「第二章 西洋産科学の伝来と受容」では、近代以降の西洋産科学・知識の導入過程及び中国の知識人がこれに対してどのように反応したかが紹介された。著者は、女性医療宣教師の医療活動と中国女性に関する叙述を検討し、西洋産科学及び産育知識が中国への布教活動を行うための道具として有してきた性格を明らかにした。近代的知には他文化に対する偏見が潜在していた（筆者はこの表現について、西洋医学を導入する人たちは従来の伝統中医を非科学的なもの、排除すべきものと認識していたと理解している）。宣教師による産婆批判は、西洋医学が産婆を排除していく過程であり、本来の伝統の出産文化の破壊に繋がるとされている。

西洋産科学・産育知識が導入されることで、医学領域において中西医優劣論争が起こった。その時点では全体として中医優位論が強かったが、産科学の領域では西洋産科学が従来の中医より優れているという認識が定着しつつあった。

このような西洋産科学の導入と伝統的な産科との争いのプロセスにおいては、当時中国のエリート男性が近代国家建設の基礎として、医学の社会的役割に注目し、西洋医学を先進的なものとして認識した。同章では姚はさらに、当時の女性の反応に注目し、当時の女性向け雑誌の内容を分析している。その結論としては、医療・衛生の「新知識」は実務的なものであり、「女性個人の社会進出」のみならず、「家族や社会に実利をもたらすもの」として、その読者層（知識人女性）に受け入れられ、社会に浸透したとされている。それに加え、新式女医が出現し、彼女たちは女性解放運動と関わりながら、女医の存在意義及び社会地位の向上のために、西洋医学・産科学の優越性を強調した。また、西洋宣教師と中国の知識人が、助産人材の養成を開始したという。

「第三章 医の専門職化と医師・助産師・産婆の分業の形成」で著者は、近代中国にお

ける医師・助産士・産婆の分業の形成過程を解明しようとした。

近代中国においては、当時の先進国を模倣し、医学教育システムの構築、医師の登録制及び国家試験の整備に向けた努力がなされ、近代的医師職業集団の形成が試みられた。このプロセスにおいては、西医と中医のせめぎ合いが激しく、双方とも国家権力を自らの正当性を実現するために欠かせないものとして利用した。教育制度及び資格免許制を通して近代的産科医が優位に立ち、技術開発と言説戦略にも力を入れた。これに対して、伝統的産科医は自己保身のために、医療制度の統一化と医療内容の科学化に努め、産婆を伝統医学の劣等性を具現化するものとして切り捨てたことが明らかにされた。

著者はさらに、当時の助産士の位置づけについて論じた。「伝染」、「消毒」、「生理出産」、「病理出産」の概念に基づいて、1920年代後半から、産科医と助産士の業界が意識的に提起され、1928年の「助産士条例」によって、助産士の職務が厳しく制限され、助産士には出産の「正常」を保つ以外の操作は一切の医療行為が禁止され、内診と外科的処置は産科医の範疇に入ることになり、助産士と産科医の職務が分けられた。

「第四章 国家による介入—助産者に関する制度の変遷」は、北京政府期と南京国民政府期に時代区分して、各々の政府の衛生行政理念、母子衛生政策及び助産者の制度化について具体的に論じたものである。

著者は、北京政府期においては、1913年北京政府に公布された「暫行取締産婆規則」を、産婆という業界に政府が介入し、国家管理することの始まりと認識している。当時、衛生に関わる具体的な取り組みは地方に任せられたために、その後、各地で「産婆取締規則」が公布された。1925年、北京公共衛生事務所が設立されたことは、近代中国の母子衛生において画期的なことであった。同時期には、新式助産者の人数が大幅に増えたとしても、法的には伝統産婆と同様に「暫行取締産婆規則」が適用されたのであった。

南京国民政府時期の衛生行政の基本理念として、姚は「公医＝医学国家化」を挙げている。つまり、医療・衛生事業を社会事業、社会福祉とみなし、それを「国家化」とする理念であった。しかし、このような中央集権の「公医」理念は、地方自治による「医学科学化」理念と遭遇し、両者のせめぎ合いが生まれた。1934年には「実施公医制度案」が提出され、1941年から公医制度が正式にスタートしている。著者は、「公医」に傾いていった動向を、「専門家支配を志向した英米式の中国の専門職化の挫折」と指摘した<sup>3</sup>。

1928年～1929年の間、南京国民政府は「管理接生婆規則」「医師管理条例」「助産師条例」を公布し、医師、助産士、伝統的に分娩介助に従事する者（接生婆）の職務と権限を定めた。1943年には「助産士法」も公布された。姚は、「助産士法」における「助産士」は女性に限らない点に特に注目している。また、助産者の制度化の意味については、第一に、「接生婆・助産士の医療介入が禁止されたこと」、第二に、「出産に関する専門家の形成」、第三に、「出生登録の義務付けがなされたこと」と、三点にまとめている<sup>4</sup>。

「第五章 助産教育のシステムの形成と実態」では、助産教育に焦点が当てられ、その助産教育のメカニズムが明らかにされた。

新式助産者の養成は 19 世紀末 20 世紀初頭に留学経験のあった新式医師及び教会に携わった人によってスタートし、私立助産学校が設置された。南京国民政府はこれらの学校を再編し、国立助産学校を設立した。各省でも省立助産学校が設置され、国立・省立の助産学校は、上級機関として学生に知識・技術を教え、さらに助産事業に対する使命感と責任感の習得にも努めた。その卒業生は、各省・各県における下級機関（地方衛生機構）に派遣されることが多かった。

助産教育の形成及び実行における立役者として、著者は楊崇瑞を挙げている。楊崇瑞は助産世界における医師の支配を否定しながら、助産業を女性の職業にしようとした。その結果、助産世界における「女性化」が進んだとされる。

「第六章 出産の現場—各アクター間の権力と交渉」において、著者は北京市を取り上げ、個人内部の混乱、人間関係の変化、科学・技術の操作性と暴力性を検討している。

姚は、北京市における産婆管理、政策推進と其中的権力関係、医師・助産士が支配地位になる過程を考察した上で、以下の四点を明らかにした。

第一に、出産という行為は本来日常的、個人的な事柄であるが、国家権力の介入によって公的な事柄になった。そこに、人間関係の変化が生じた。政府は、助産師と産婆の地位の不平等を意図的に創り、助産師と産婆の間を引き離した。そこに「助産士」という新しい助産集団を作ることによって、産婆と産婦の関係を引き離した。産婆を排除しようとする図式は明らかであったとされる。

第二に、政府が産婆を具体的に取り締まる過程は、医療事故の原因究明及び責任追及より、助産士と産婆の間での権力のせめぎ合いの「場」である。産婆の取り締まりには、政府が産婆をより劣等に位置付ける目的があったという。

第三に、産婆を取り締まる具体的事例として挙げられるのは、特に裁判事例である。科学への一義的な信頼が、医療事故の場合に、産婆が常に全責任を負うべき論理構造を規定したことは明らかであるとされた。

第四に、医師・助産士からなる専門家集団が、出産という一領域において、独占権を獲得していた。その権威の確立にあたって、行政の干渉が不可欠であったのだという。

「第七章 出産の近代化に対する女性たちの反応」は、出産形式の変化の受け手としての女性の反応、主体性を考察したものである。

著者はまず、当時の政府と知識人の言説が挙げた新式出産を阻害する要因について述べた。その要因は大別して、「男女有別」の伝統規範、経済的貧困及び女性自身の知識の欠如に分類されている。

さらに姚は、新式出産に対する当時の女性の反応を階層ごとに考察した。上中流階層の女性は率先して新式出産を受容したが、上流階層と中流階層とでは、その受容の理由は異なった。上流階層の女性は、新式出産を一種の社会地位のシンボルとみなしたのに対して、中流階層の女性が新式出産を受容する理由は、近代家族理念の形成、家族構成の変化、ライフスタイルの変化など複数の要素からなっていた。一般庶民の女性にも、新式出産があ

る程度普及されたが、姚はそれが「政府がやや強制的に推進してきた」出産の一つの選択肢に過ぎないと指摘した<sup>5</sup>。下級階層の女性は最初、経済的要因で安い料金の旧産婆に頼ったが、彼女たちは地域ネットワークが弱く、容易に新式出産を受け入れる階層でもある。1930年代初頭から政府が実施した助産費減免措置は、下級女性が新式出産を選んだことを背景とするものであった。

同章ではまた、女性の体験に注目し、新式出産の受容過程を考察した。1930年代前半まで新式出産への抵抗はまだ強く、産婦の病院出産体験の記録では、恐怖と不安、孤独の記述が多かった。1940年代になると、医師・助産士への賞賛や感激の「声」が増加し、新しい出産文化が形成されたという。

「終章 近代中国のジェンダー・国家・文化」では、著者がこれまでの考察をまとめ、近代中国におけるジェンダー・国家・文化の特質を抽出している。

近代中国においては、産婆が医師・助産士の下位に移行され、産科医・助産士・産婆の相互関係も、複雑なヒエラルヒー構造を形成していた。産婦にとって、出産にあたり誰を選択するかは、大きな問題となった。

姚によると、中国における産科医と助産士の関係には、以下の特徴がある。第一に、両者には法律上の分業があったが、競争関係というより協力関係であった。第二に、助産士の職務範囲は「助産士条例」によって実際に広がった。第三に、産科医が男性、助産士が女性というジェンダー的非対称性は顕著ではなかった。これらの特徴が形成された理由として、伝統的なジェンダー関係、産科医の戦略、国家目標の三者の一致が挙げられる。

著者はまた、近代中国における助産者間の関係の変化と出産文化の変化には、各権力主体間の力関係のみならず、外来文化の受容における諸力の相互作用が映し出されていると指摘した。さらに、知識人が描いた科学的助産という理想像に対して民衆の声は多様であり、知識人の認識との乖離がみられたとされる。

#### 4 おわりに

本書で著者は、近代中国において、伝統的な産婆世界が解体し、医師・助産士の権威が確立する過程を、文化や行政、教育システム、専門職化、そして出産主体としての女性など、多方面から包括的に考察した。そのプロセスにおいては特に、国家の役割と女性の主体性が強調されている。

同書は、近代中国の出産における様々な関係の変化を解明することで、現代中国における出産をテーマとする研究に大きな示唆を与えた。現代中国では、ますますグローバル化が進行している。出産についての欧米や日本の考え方がマスメディアを通じて中国の人々の認識にも影響を及ぼしている。外部からの情報と中国の伝統的な考え方が、常にせめぎ合っている。新しい知と文化の交流・受容のプロセスでは、実際に子供を産む女性を主体として考察する必要がある。また、筆者は、中国では未だに、国家が出産について強い主導権を持っており、政府が出産領域で大きな役割を果たしていると考える。妊

娠・出産に関わる情報に対して、現代の中国女性はどんな態度を持ち、どう受けとめるか、その自主的な学習プロセスとその背後にある国家・社会の機能を今後の課題として検討したい。

---

<sup>1</sup> 姚毅『近代中国の出産と国家・社会——医師・助産士・接生婆』、研文出版、2011、p.15。

<sup>2</sup> 同前書、p.20

<sup>3</sup> 同、p.172

<sup>4</sup> 同、p.185

<sup>5</sup> 同、p.306